

難波西鶴と

海の道

【59】

森田 雅也

西鶴が長崎商いの成功例を多く挙げていることは、「こまで述べてきましたが、まだまだあります。今までの例は京都から長崎への商いで成功した人でしたが、堺での成功者は、もっと詳しく描かれています。

『日本永代蔵』「貞享5(1688)年刊」巻六の三「買置きは世の心やすい時」には、「小力屋」という堺に住む「長崎商人」を挙げています。この商人は、40歳以降は毎年正月元日に遺言状を書いて、いつ死んでも悔いが残らないように心を決めて、精いっぱい正

直に世渡りしているうちに自然と金持ちになったという、見上げた人物でした。西鶴が言うには、この堺港は長者の隠れ里のような町で、底の知れない大金持ちがいくついてもいる。ことに『名物記』に載るような立派な茶道具類をはじめ、唐物・唐織などを先祖から五代このかた買置きして、内蔵(金庫)に収めておく人もいると言っています。

中世の堺は南蛮貿易で限りなく栄えた地です。その後、豊臣秀吉がその富商たちを大坂へ移住させたことにより衰退し始め、関ヶ原以降、特に大坂夏の陣で町

が灰じんに帰したことから、消滅したように思われがちですが、実際は江戸時代にも別の栄え方をしました。それが、徳川家康庇護のもと発達した糸割符貿易でした。

「堺商人の貿易活動も鎖国まで引きつづいて行われ、特に徳川家康が慶長9(1604)年、堺を筆頭として、京・長崎の商人に糸割符貿易の特権を与えたことから、白糸以外にも薬種・香料・反物などが長崎から堺へ運ばれた。しかし鎖国後は貿易の利を長崎にうばわれ、商業は大坂に圧倒されて、かつての軍事産業の名残りをわずかに刃物工業のなかにとどめたにすぎない」(『国史大辞典』より)

まさに堺は長崎と海で結び、栄えたのです。『日本永代蔵』の「堺」「長崎商

実は、長者の隠れ里、

い「小力屋」は、当時の実態にあった発想に基づいていると言えましょう。ところが、西鶴は堺商人の衰えぬ、その底知れぬ経済力について、また付け加えます。

まず、寛永年中(1624~1645)から毎年手に入れてきた金銀を、40、50年前から一度も金蔵から出したことのない金持ちがいることを挙げます。さらには、嫁いでくるときに妻が持ってきた持参金銀50貫目(約1億)を手つかずのまま、娘に持たせて嫁がせた金持ちがいたことも挙げます。

堺は暮らし向きの実家がゆったりしているのが、この地の特徴だと西鶴は絶賛します。その地の長崎商人の話。次回に続きます。

(関西学院大学文学部文学言語学教授)

暮らし向きゆつたりの堺